

あいさつ

松本久介実行委員長：皆さん、こんにちは。実行委員長をしております松本と申します。5年前にこの場で開催いたしました終着駅サミットの実行委員長を務めておりましたので、今回も実行委員長を引き受けました。

私は呉西地区公共交通再生研究会という会のメンバーです。今年が城端線の120年であるということで、そのための準備を始めておりましたが、4月に安田（賢治）会長が急に亡くなりました。大変、困惑いたしました。後に須摩さんに会長を引き受けていただいて、この実行委員会を構成してまいりました。

とにかく、このような記念事業は、“一発花火”で「城端線があつてよかった」「120年だ。誕生日おめでとう」というようなものになりがちですが、私たちはそうではなく、「どうして明治30年に、この地に鉄道が走ったのだろうか」「それ以前は、どうやってコメなどを運んだのだろうか」といったことを、この機会にゆっくり学ぼうと考えました。

今年の7月から11月まで計6回、連続講座を開催してまいりました。それぞれの講座は大変難しい内容でありましたが、毎回60人を超える皆さんに集まっていたいて、「明治の人は、どうして鉄道を引こうとしたのか」などといったことを振り返りました。

鉄道の建設許可が下りて高岡まで開通するのに、工事期間はたった2年でした。その2年間で、田んぼを買い、泥を盛り上げて線路を作り、外国から蒸気機関車を輸入して、城端線が走り始めるわけです。

重機も何もない時代に城端から高岡まで線路を作った、というのもすごいし、その期間がたった2年間だったということも、本当にすごいことでした。「明治の人はすごいなあ」とつくづく思いました。鉄道は家のない田んぼの中を走るわけですから、その跡に町が作られていきました。

鉄道が建設されたことによって、砺波平野はものすごく豊か、田舎の中では最高に豊かになりました。

戸出には、戸出物産という大きな会社がありましたし、油田を過ぎ砺波に行きますと、日本製麻という大きな工場がありました。福野に来ると、川田工業、富山機械、富山紡績などがありました。城端からは絹織物などが汽車に載って運ばれたのだらうと思います。

加越線があつたときは、庄川町に第一編み物という大きな工場がありましたし、井波には大建工業や東洋紡井波工場がありました。津沢へ行くと、ゴールドウインという大きな会社が誕生しました。

我々となみ野の人間は、車で5分もいけば、工場があつて働けるということを当たり前のように思っているわけですが、全国の農村に行きますと、そんなところはほとんどありません。私たちは、本当に恵まれた地域に住んでいるということを、連続講座であらためて感じたわけです。

6回の連続講座では、主に過去を振り返りましたが、今日のシンポジウムは、人口が減り、若者が減り、高齢者が増えるという、我々が経験したことの無い新しい時代に向けて、地方はどうするのか、その中で公共交通はどうあるべきか、を考えることにしております。

講師、パネリストの皆さんには、大変お忙しいところ、いらしていただきまして、ありがとうございました。実のある議論になればいいと思っております。

今日は、ジオラマを展示していただいております。春から今日まで、二塚、戸出駅などで、いろんなお祭りやイベントの機会をとらえて、10数回を超える120周年記念のジオラマ展を展開していただきました。同好会の皆さんには、心から感謝を申し上げたいと思います。

開会に当たりまして、今までご協力をいただいた講師の先生方、そして準備をいただいたスタッフ、関係者の皆さんに心から感謝を申し上げて、開会のごあいさつとさせていただきます。

本日は、ありがとうございました。

田中幹夫（南砺市長）：皆さん、こんにちは。本当にたくさんの方にお集まりいただいて、城端線120年のシンポジウムが盛大に開催されますこと、今ほど松本実行委員長のお話にもありました通り、多くの皆さんに、プランを立てていただき、6回にわたる勉強会をつないでいただいて、この日を迎えましたことを、心から敬意と感謝を申し上げる次第です。

また今日は、広く県内外から、特に呉西地区の皆さんに、たくさんいらしていただいております。開催地の市長として、歓迎のあいさつを述べさせていただきます。

今日は田中輝美先生、藻谷浩介先生をはじめ、富山大学に4月から工学関係の新しい学部ができるということで中川大先生にもいらしていただいて、基調講演、シンポジウムを行っていただくとのことです。

私自身がこの城端線の120年をどう捉えるか、ということですが、先人の皆さま方の大きな夢を乗せて、ずっと走ってくれている城端線は本当に素晴らしい、と思っております。

今、松本委員長のお話にもありましたように、我々は地方創生ということで、企業誘致や定住移住などということを進めておりますので、120年前に、この地域のためにお骨折りをいただいた皆様方のご苦労が、本当に分かるわけであります。

それを受けて、これからどうするか。それはもう答えが出ています。「みんなでこの城端線を盛り上げていこう」「我々にとって住み良い古里を、しっかりと次の世代に引き継いでいこう」ということだろう、と思っています。

今日、お越しになっておられます藻谷先生とは先週、滋賀県東近江市で開催された「ローカル・サミット」というシンポジウムで、ごいっしょさせていただきました。

その中で、「地域ブランド」という話が出ておりました。「地域のブランドって、新しいものをどんどん作っていくことなのか」と思っておりましたら、高校生が「もっともっと地域のことを知りたい。歴史を学びたい。そういう場所を提供いただくことも大事なんだ」という発表をしていました。

そして、「それを受けて、我々が新しい未来を築いていく。我々が新しいアイデアを出していく」「だから、そういう場を作っていただきたい」と訴えていました。本当にうれしく思いました。

私たちの豊かな古里も、我々がどう捉えて、次の若い世代、子供たちにつないでいくか、ということが重要だと思います。

今日、いらしている田中輝美さんもローカルなネットワークが非常に重要だと言っておられ、「関係人口」という考え方をお持ちです。

南砺市は今「貢献市民」とか「応援市民」という言い方をして、全国から南砺市ファンを集めております。同じような考え方、取り組みだと思しますので、今日はお話を興味深く聞かせていただきたいと思っております。

私たちの地域にいらっしゃるいろんな方々が城端線に乗って、住んでいる私たちの気持ちとは全く違った意味で、「こんな素敵なローカル線」「こんな素敵な城端線は大事なんだよ」とよく言ってくれます。

そういった方も含めて、城端線の応援団を、我々が今日お集りの皆さんといっしょに広げていくことも、非常に重要なのだろうと思います。

今日、お配りしてあるパンフレットの中に、黄色のチラシが入っておりますが、これが応援市民の申込用紙です。市外の方は、名前を書いていただくと、カードと名刺が送られてくるそうですので、大変お徳感があります。ぜひ、そのことをお伝えしたいと思います。

舞台そでにいまして、下手ですが、和歌を詠わせていただきました。

「先人の思いを乗せた城端線 未来へ向かって夢乗せ走る」。

お粗末でございました。